

JAAC だより

留学とグローバル化する教育の場（４）

— “グローバル人材育成”の一環として、日本の高校から海外の大学へ —

本誌先月号のなかで、『日本の高校に海外大学入学課程を導入』と題してお話した「国際バカロレア：International Baccalaureate (IB)」について、今号でも引き続き皆さんと一緒に考えてまいりたいと思います。

「国際バカロレア：International Baccalaureate (IB)」(以後、IBと表記します)とは、簡単に言えば世界共通の大学入学資格試験のことです。スイスに本部を置く財団法人である国際バカロレア機構 (Organisation du Baccalaureat International) が、小学校から高校までの各教育課程に一定の履修基準を定め、それらの教育課程修了時に修了試験を受けて得られる資格です。それら一定の履修基準のなかには公式教授言語として英語、フランス語、スペイン語の3か国語が定められていることが特徴的です。現在は世界約140か国、約3300校の学校で採用されていると言われています。そのなかで、IBの後期中等教育用課程 (高等学校に相当)で行われる Diploma Programme (ディプロマ・プログラム：略称DP) 課程は、それぞれの国の独自の教育制度に依存しない大学入学資格となっています。DP課程は、日本の高校では高2と高3の2年間で行われ、『知識の理論』、『課題論文』と『教科外活動としての奉仕活動』の3つの分野で構成されています。DPは世界の約120ヶ国、約2000の学校で認められていて、文部科学省によると、現在、日本国内でのIB高校用課程であるDP実施認定校は複数の私立校とインターナショナルスクールを含めて15校で、2010年度のDP資格合格者は211人となっています。世界レベルの数字で見ると、2010年度では約42,000人が試験に合格していると言われています。このように、DP資格合格者はアメリカのハーバード大学やイギリスのケンブリッジ大学、オックスフォード大学など世界の著名な、あるいは、名門校と言われる大学を含む約2000の大学の選考を受けられることになるわけです。ちなみに、現在、日本国内の大学においては約260校がIB (DP) を入学資格として認定しています。国立・公立大学の場合は入学試験に際し、DP資格の他に日本語能力試験も合わせて要求する学校も多いようですが、私立大学ではDP資格のみで受験資格とする学校も幾つかあるようです。当然ながら、各大学は独自の試験を設けているわけですから、独自の試験よりもDP資格を重視する理由は大学側には全くありません。したがって、日本の大学に入学を希望する海外の学生にとって、DP資格が有利になるとは限らない場合もあることを知っておくべきでしょう。

では、なぜ今、日本でIBが目ざされはじめたのでしょうか？ 日本におけるIB導入は今始まったものではありません。もともと、日本の学校として認定されていないインターナショナルスクールなどでは以前から英語またはその他のIB公式教授言語によってIBを導入しており、DP資格合格者は日本の大学をはじめ、世界の大学へ進学していました。また、日本の教育現場においても少数の私立校ではありますが、以前からIBを独自に導入・実施し、それなりの実績と結果を出してきています。IBが大きな話題となったのは、本誌先月号(3月号)でお伝えしたように、文部科学省が今後5年間をかけて、IB実施認定校を現在の15校から200校に増やしていくことを発表したことだと思います。これは昨年6月に、国の『「グローバル人材育成推進会議」』が、日本の学生の語学力やコミュニケーション能力を高めることを目的としてIB認定校を増やすことを提言し、8月には政府が閣議決定をした日本の『成長戦略実行計画』にIB認定校拡大策を盛り込んだことによると思われる。経済発展が著しいアジア諸国のなかでも、特に近年、中国がIB認定校を急速に増やしていることは特筆すべきであり、日本としても、このことを静観できない状況にあるのではないのでしょうか。

IBを導入する理由は各国によって異なることでしょう。その国の経済的、社会的、文化的、学術・教育的な様々な要素が途上の状況にあることから、自国で教育を受けるよりも先進国の教育を受けることが自国の発展に繋がると考えられる場合があります。一方、世界的にも先進国であり、教育水準も世界的に優位でありながらもさらに何らかの公的な政策や、公的あるいは私的な目的のために海外のより優れた教育機関を望む場合があります。日本においては後者に該当するのではないのでしょうか。

前述のように日本におけるIB実施認定校を増やそうとしている試みは『グローバル人材育成の一環』と、とらえているものです。このことは、今、日本社会が直面している『若者たちの内向き志向』とも関連づけて考えるべきものではないでしょうか。その一つに、日本人留学生の減少が挙げられると思います。海外に留学を希望する、または実際に留学する日本人学生の総数は2004年をピークに年々、減少傾向にあります。少子化が進むに連れて、学生の全体数が減っているわけですから(次ページに続く)

当然のことながら海外に留学する学生数も減るわけですが、その減少傾向の理由の一つには、若者たちが『海外・・・』に大きな興味を持たなくなってきたことも挙げられるのではないのでしょうか。このことは、留学のみならず、海外旅行に出かける学生の割合も1980年代から2000年代にかけての割合と比べると低いものとなっています。もちろん、これらの減少傾向には他の要因もあります。本紙先月号にて掲載した『留学とグローバル化する教育の場（3）- 大学秋学期入学制への移行を考える -』でもお話ししたように、4月始業制の日本の大学と秋学期入学制を実施している多くの海外大学との学期ギャップが留学を妨げていることも、留学を志す日本人学生の数を減らしている一因とも言えるでしょう。さらには、長期にわたる景気の低迷から留学に必要な費用の捻出が難しくなっていることも挙げられます。

このように『若者たちの内向き志向』を改善する方策の一つとして、海外に留学する日本人学生を増やす試みがあるのであれば、IB 実施認定校の拡大と大学の秋学期制導入には共通の利点がありますね。特に、高校で実施される DP のカリキュラムには、コミュニケーション能力、積極性、異文化対応とその理解、と言ったグローバルな社会性を持ち合わせた人材の育成と、グローバル化社会で通用する人格形成が含まれていますので、これらを履修した者にとっては海外の大学への入学がよりスムーズになると思われます。しかしながら、IB 課程は日本の高校指導要領とは内容も異なり、授業も原則として英語で行うことから、一般の高校での導入は非常に難しいとされています。文部科学省が IB 認定校を増やす方針を打ち出し、日本の高校内に実質的な海外大学留学支援課程を設置していく試みには、さらなる実務者レベルでの協議が必要とされると同時に、直接の教育現場においては賛否両論があると思います。実際に IB 課程を実施するには、英語による高度な授業ができる教員の確保と育成が必要でしょうし、現行の高校の学習指導要領との調整も不可欠です。これらの諸問題を検討し、解決していくのに5年間という期間で十分なのではないでしょうか。今後も経緯を見守っていきたいですね。

5年後に全ての学校が IB 実施認定校となるわけではありませんが、徐々に『留学』という概念が特別なものから一般的な考え方へ変わっていくのではないかと思います。本紙 JAAC だよりの 2008 年 4 月号（2008 年 3 月 15 日発行）では、その時すでに『“留学” から “海外進学へ”』のなかで、海外で勉強することの必要性和重要性をお話ししながら、それは決して『留学』ということばの背景にある特別視された概念を持つものではないことをお話ししてきました。それがようやく、少しずつですが現実のものとなってきているように伺えます。

今まで本紙でお話してきた『留学とグローバル化する教育の場』を通して、はっきりと明確になった点があると思います。それらは、①国の政策としてグローバル人材の育成を推進していること、②グローバル人材を育成するには海外で学ぶ必要があること、の2点ではないでしょうか。つまりは、現在、留学中の JAAC 生の皆さんは、これらの2点の条件に当てはまっているということです。留学中に学習することは、大学の単位を取るために履修科目をこなすだけに留まらず、グローバル化社会に本当に必要な人材になるためには何を学ぶ必要があるのかを、併せて考えていただくことを望んでいます。皆さんは留学を志した時点ですでに、『内向き志向』の若者ではないことが証明されているのですから。（完）（カリフォルニア事務局：照井）

今年、新社会人となった JAAC 生の皆さん、ご就職おめでとうございます！

今年、晴れて新社会人となった JAAC 生の皆さん、ご就職おめでとうございます。今春の大学生就職内定率は、2月1日現在で 80.5% でした（前年同期比 3.1 ポイント増：厚生労働・文部科学両省の発表）。前年よりも若干改善されたとは言え、2000 年以降で過去 3 番目の低水準で、内定が得られなかった学生は約 8 万人とみられています。このような状況下で、留学生という立場で就職活動をされてきた皆さんにおかれましては、多くの困難もあったことと思います。社会人となられた今、皆さんが留学で培ってきた英語力や様々なスキルが正しく評価され、今までの努力が必ずや報われることと信じております。新社会人となられた皆さんには、これから多くの難しい局面や試練が待ち受けていることと思いますが、それらの多くは皆さんだけに訪れるものではありません。どうか、それらの壁を乗り越えていく力を養ってください。頑張れ、JAAC 生 OB、OG！！

Let me remind you.....

★JAAC 生の皆さん、保護者の皆さん、何でもお気軽にご相談ください

■今春卒業をされる JAAC 生の皆さんへ： 卒業取得単位が必ず取れるか、再度の確認をしておきましょう。また、現在行っている就職活動や、今後の就職活動計画については常に気にかけておくことを心掛けてください。

●JAAC 本館内保護者様専用ご連絡・ご相談窓口：

フリーダイヤル 0120-525-626 tokai@jaac.co.jp 担当：高瀬

JAAC 日米学術センター 鈴木：t.suzuki@jaac.co.jp ©カリフォルニア担当：照井 k-terui@mtg.biglobe.ne.jp